經濟論叢

第148卷 第4・5・6号

哀 辞

故 堀江保蔵名誉教授遺影および略歴

G・マリーニズの外国為替論(1).....	本 山 美 彦	1
19世紀末ドイツ電機工業における労働能率増進策(4).....	今久保 幸 生	22
スコットランド坑夫繫縛制変遷概観(2).....	加 藤 一 弘	48
アメリカ鉄鋼資本の多角的事業展開と 日米合弁企業の位置づけ(2).....	石 川 康 宏	70
低開発国におけるドラーリゼーション(dolarization).....	安 原 毅	87
持続的インフレーションと政府.....	国 宗 浩 三	104
時間選好に関する基礎的な考察.....	依 田 高 典	122
短期調整過程の二類型(1).....	森 岡 真 史	140
追加償却会計と取替原価償却会計.....	藤 井 深	162

研究ノート

FASB 1976年討議資料に関する研究ノート.....	藤 井 秀 樹	181
------------------------------	---------	-----

追 憶 文

堀江保蔵先生を偲んで.....	角 山 榮	190
堀江保蔵先生を偲ぶ.....	山 本 有 造	195

学会記事・經濟論叢 第147巻・第148巻 総目録

平成 3 年10・11・12月

京 都 大 學 經 濟 學 會

堀江保蔵先生を偲ぶ

山 本 有 造

夢外・堀江保蔵先生が亡くなられた。1991（平成3）年8月23日、満87歳と7ヶ月余の御生涯であった。

私が先生と最後のお別れをしたのは、翌24日の朝、京大医学部・総合解剖センターにおいてであった。キャスター付の寝台にやすまれた先生はとくにお寝れもなく、生前のままの大きなお身体であった。土曜日の人気のないセンターの中で、私はひとり瞑目しお別れを申し上げた。

先生が御猷体の意志をお持ちであったことを不明にしてその時まで存じ上げなかったけれども、伺ったとたんに、先生であればさもありなんとすぐに納得することができた。先生は明治生れの近代人であられた。

私が先生から直接お教えを受けたのは大学院修士課程の2年間であり、その後もわがままな弟子でありつづけたから、先生の学問上の業績を総括する能力を持たない。半解の知識でいえば、先生のお仕事は、(1) 国産専売を中心とする近世経済の実証的研究、(2) 明治以降日本経済の近代化を論じた日本資本主義分析、(3) 日本における近代企業家の研究、(4) 日本経営史における「家」の研究（さらに加えれば、(5) アメリカ経済史研究、(6) 経済史概説）に大別されよう。

私から見て、先生の業績の特徴は着眼の新らしさと分析の明晰さにあった。先生の御論文はつねに先駆的であり問題提起的であった。例えば、先生が日本における経営史学、数量経済史学の草分けの一人であられたことは、史学史上記憶しておくに値しよう。しかし、ズバリと鮮やかに問題提起をされた後は、同じ問題をくりかえされる興味をあまりもたれなかったし、また働きざかりのころは時間もゆるさなかった。「あとが悪いんだ」と自ら述懐されているように（「名誉教授インタビュー・堀江保蔵名誉教授に聞く」『経済論叢』135巻4号）、まいた種の収穫は多く次の世代に委ねられた。ただ、京大退官講義「日本経済史における『家』の問題」いらい心を傾けられた「家」のテーマは、

1984（昭和59）年80歳のときに刊行された『日本経営史における「家」の研究』（臨川書店）に結実し、その後も、これをライフワークと思い定められたように一貫して情熱をそそがれた。研究者としての先生の生活は晩年までお変わりにならなかった。

先生はテキパキと物事を片づけるのがお好きであったから、マネジメントの方面でも多分有能であられたことであろう。学部長、図書館長、（京都産大）副学長の激職をこなされ、諸学会の理事を長く勤められ、経済学部同窓会や東南ア研の創立といった陰の仕事にも力を尽された。学内行政がお好きであったとは思われないが、先生は自ら属する組織を大切にされ、その活性化をつねに考えておられた。思うに、組織の一員として世話になっている以上、自分で役に立つことがあれば力を尽すことを当然とされたのであろう。

先生の号「夢外」の由来をおたずねした折、「自分は若い頃から世の中に書をなすことはしないでおこうと思ってきた、夢外は無害だ」というのがお答えであった。肉体的にも精神的にもスマートであられた先生の印象がよかったから、このお答えには一瞬虚をつかれた。この世に生きたからには自分の力の及ぶかぎり世の中に貢献したい。これが先生の人生訓であったと幼い解釈を下して、自ら納得したことであった。

先生の眠られる総合解剖センターは医学部構内の北東角にあり、東一条バス停の斜め前にあたる。毎日帰宅の途中バス停に立つ私は、その方角に軽く目礼して先生にご挨拶申し上げるのである。